

白井明大さんのこと

奈良 敏行



白井さんは定有堂閉店情報を、いち早くネットに速報した人だ。注文取り寄せ停止を告げる掲示を目に留め、「閉店」と告知した。実際はその一ヶ月後が閉店だったのだが、告知の仕方はもの静かなものだった。余韻がこころに残った。

五月(二〇二四)刊行の『ヘリヤ記 1 《声たち》』という文庫大の作品を先日献本してくれた。ファンタジーとあっていいのだろうか。不思議な感觸の物語で数回読み返した。同時に他の著作十数冊にも目を通した。詩集・歳時記・エッセイ・絵本だった。憲法を詩に翻訳したものであった。

『ヘリヤ記』はタルコフスキーの映画『ストーカー』を思い起こさせた。少年が「ゾーン」に分け入り帰ってくる話なのだ。なぜ何度も読み返したかという点、世界観中心の物語だからだ。記号着地することの少ない物語造型だ。そのわからなさがかこち良い。少年アムナハウスは「人為的災害の負の遺産」とともに閉ざされた「ヘリヤ」地域に暮らす。朱染めのロープで囲われたゾーンの中で、禍々しさを放出する「石」の回収をナリワイとする。禍々しさを封じ込めて消え去らない残土は「浮遊する空気」を放出する。さぎ波のように空間を歪ませて現れるこの「空気」と触れ合うとき、アムナリウスだけはさきやきを耳にとらえる。そのさきやきが《声たち》なのだ。物語は始まったばかりで、このゾーンがどんな「希望」をもたらすかはまだわからない。

白井さんの作品の中でわたしのこころに一番残ったのは、沖繩から山陰に移り住んでからの詩集の中の一行だ。

(『着雪する小葉となって』)

《後悔はないの、てさぎなみに訊かれた》

この「て」と切れてつながるのは白井さんの独特の呼吸だ。反復して出現する。沖繩へ移り住んでいた頃、自分の二十代を振り返ったエッセイの本もある。タイトルがとても魅力的だ。『希望はいつも当たり前前の言葉で語られ

る』。内容をタイトルに圧縮したこの表現は詩的でもある。「どんな仕事でも手を抜かずにやっていたら、きつと誰かが見てくれる」「頼まれたことは、やる。頼まれなかったことも、やる」「簡単なことがいちばん難しい」言葉はだんだん詩的なものに昇華されていく。「やさしい言葉が心を縫う ようやく息をそととつける」。

白井さんはそんな風に生きて、そしてわたしの前に現れた。本屋ではもちろん白井さんの本を扱っていた。コーナーも作っていた。でも「遅れて読む」わたしだったので、すべてに目を通したのは今回が初めてだった。きちんと読もうと思ったのは、ぬぐいがたく離れない言葉と出合っただった。

《生きようと生きるほうへ》

これは思潮社刊行の本のタイトルでもあるし、「生きる」という詩の末尾でもある。記号着地しないこの言葉が、わたしにとつての《声たち》との出会いだった。

《人のいのちが暮らしの記憶と名といまを持って

生き続ける先で 交わり 生まれ 変わりながら

幸せになつてと願う》

《でもきつと

いまいるここから

生きようと生きるほうへ》

白井さんは詩人であるとともに『日本の七十二候を楽しむ』などの歳時記の作家でもある。「いのち」と「暮らし」が「ヘリヤ」では失われつつある自然を惜しむように、ここに膨大に書きたてる。なぜ旧暦を慈しむ仕事をしたのか不思議だったが、裏返しの場合に「ゾーン」がある事を知って腑に落ちるものがあつた。

《ひとつひとつ花の名まえを調べて覚えていった。そのときそれが、ぼくにとつて心からの迷いの余地なく綴(つづ)れる、言葉だった。花の名を覚え、書くことは、詩を書くこととほとんど同じ感覚だった。》

「生きようと生きるほうへ」、この「ことば」が、触れ合つてわたしに届いた《声たち》だった。

2024. 07. 23

白井明大さんの著作

『ヘリヤ記 1 《声たち》』詩之友社 2024

『着雪する小葉となつて』思潮社 2021

『希望はいつも当たり前前言葉で語られる』草思社

2019

『生きようと生きるほうへ』思潮社 2015

『日本の七十二候を楽しむ 増補新装版』

『旧暦のある暮らし』KADOKAWA 2020